

平成19年度

第2回「SYDボランティア奨励賞」受賞者名簿



後援:文部科学省

社団法人青少年育成国民会議

社団法人中央青少年団体連絡協議会

財団法人日本レクリエーション協会

社団法人日本青年奉仕協会

社団法人日本キャンプ協会

受賞者一覧

(敬称略・順不同)

文部科学大臣賞

- 香川県立多度津水産高等学校(香川県)

優秀賞

- 【小学生の部】 該当なし
- 【中学生の部】 木更津市立鎌足中学校(千葉県)
- 【高校生の部】 (学)高倉学園豊橋中央高等学校(愛知県)
- 【一般の部】 該当なし

特別賞

- 天草市立城河原小学校(熊本県)
- 志布志市立通山小学校「通山亀ん子クラブ」(鹿児島県)
- 東横学園中学・高等学校 中学2年(東京都)
- 多治見市立多治見中学校(岐阜県)
- 神奈川県立相原高等学校「相こっこプロジェクト」(神奈川県)
- 熊本県立盲学校(熊本県)
- 立命館大学国際部国際協力学生実行委員会(京都府)
- ブラジルを美しくする会(ブラジル)

SYDIは、文部科学省所管の社会教育団体です。青少年の健全育成を中心とした様々な活動を行っており、1906年、東京府師範学校(現在の東京学芸大学)に学ぶ蓮沼門三を中心とする青年たちによって創立されました。“愛と汗の実践”を理念として「心の教育」一筋に歩み続けて102年、今、みんなの幸せを願う「幸せの種まき運動」を全国的に展開しています。

文部科学大臣賞

■ 香川県立多度津水産高等学校（香川県）.....

「出前授業」「出前水族館」による小学生への海洋環境問題啓発活動

多度津水産高等学校では、小型実習船を用いた海面浮遊ゴミ回収や、全校生徒による海岸清掃などを伝統的に実施していたが、ゴミ回収活動はゴミとの「いたちごっこ」である。そこで、この連鎖に終止符を打つのは、ゴミを捨てる人を無くし、海の環境を守る気持ちをもってもらう事と考え、未来を担う子供たちへの海洋環境問題啓発に重点を置くこととし、活動を始めた。

啓発活動として、子供が興味を持ちやすいように、クレイアニメの手法でコミカルなムツゴロウの「むっちー」を主人公とした環境問題をテーマとするビデオ作品を放送部が制作した。これを視聴覚教材として貸し出したり、出前授業で小学生たちに視聴させている。このビデオは子供たちを惹きつけ、楽しみながら環境問題について考えるきっかけとなっており、視聴した子供たちから感想文が送られてくるようになった。

さらに、ビデオの貸出しだけでなく、高校生自らが県内の小学校に赴き、出前水族館を設置、小学生に海洋についての関心を高めてもらうと共に、自作アニメビデオの上映会を伴う出前授業を行い、海洋問題の解決に向けて活動を行っている。出前授業は昨年からはじめ、今まで4校の小学校で実施された。

出前水族館では、小学生たちが海の生き物を観察し、これらの生物を身近に感じたことによって、慈しむ気持ちが芽生えたことが、寄せられた感想文から見てとれる。未来を担う小学生が海洋環境の保全について高い意識を持つ事ができれば、将来的な波及効果は非常に大きいと考えている。

今後も、学校の伝統行事である海浜美化活動を継続していくとともに、クレイアニメによる啓発ビデオをシリーズ化して制作し、小学校への出前授業、出前水族館の活動を推進し、海洋環境問題の解決へ向けて一人でも多くの小学生に啓発教育を行っていききたい。



< 小学校での出前授業 >



< ↑ 出前水族館 >



< ムツゴロウのむっちー >



< ← 海面浮遊ゴミ回収 >

優 秀 賞

【中学生の部】 木更津市立鎌足中学校 (千葉県)

「ゴミ問題とリサイクルグループ」

鎌足中学校の学区域は、調整地区に指定されており、自然に恵まれた地域であるが、人目につかない林道も多く、約4キロにわたる不法投棄街道がある。その大量のゴミ問題を解決したいと考え、平成15年度から片付けボランティアに取り組んでいる。身近な環境問題を考え、解決するための実践をし、地域に役立つ活動を行うことによって、郷土を愛し、将来の故郷を創る生徒、地域に根付く生徒を育てられると考えている。

主な活動①不法投棄解決活動(片付け作業、投棄禁止を訴える看板作成、投棄禁止ビデオの作成)②アルミ缶回収活動(地域の店舗から定期的に回収し、収益金を活動資金としている)③ホタルの生息地の保存活動(不法投棄を許さない風土を作りたいと「ホタルロード」という名前をつけ案内板を設置)

学区内に不法投棄現場があることと、その現状を知ること、自分たちでできることを考え、行動し、その力が地域の役に立っていることを実感し、この活動が生徒たちの自信と誇りになっている。一人一人が意識して行動することで、周囲の反応が変化することを学ぶことができた。また、この活動は生徒たちの問題意識を高め、郷土を愛する気持ちを育てる基にもなっている。

中学生の力だけでは解決し難い問題であり、グループ外の生徒や地域の方々の協力を得る働きかけを行っているが、残念ながら現在も不法投棄は続いている。その事を踏まえ、来年度はこの活動を地域に周知するためのビデオ上映会等を検討し、今後も継続してこの活動を行っていきたい。



<ゴミの片付け作業>



<ホタルロード看板設置>



<不法投棄の粗大ゴミ>

【高校生の部】 学校法人高倉学園豊橋中央高等学校（愛知県）

「リヤカーボランティア」

豊橋中央高校のボランティア活動は、生徒会が中心となって行われ、高校での3年間の間に全校生徒のほとんどがボランティア活動に参加し、福祉施設の行事の手伝いや利用者の介助、清掃活動や街頭募金などを行っている。

「リヤカーボランティア」は平成16年の文化祭に、地域に恩返しのできる、それでいてやりがいのある企画を作ろうという事からスタートした。「どれくらいゴミが落ちているのか見てやろう」とリヤカーを引きながら、夏休みを利用して三河湾一周をコースにする事が決定、生徒52名が参加し、約174キロを走破した。

平成17年には、旧東海道を北上するコースに決定。静岡県沼津中央高校と連絡を取り、「中央高校交流」と名づけ、ゴミ拾いにより交流を深めた。生徒延べ223名が参加、約204キロを走破。平成18年は、再度三河湾を一周、生徒延べ329名が参加。平成19年度は豊橋駅～渥美半島縦断をコースとし、生徒延べ211名、約140キロを走破した。

何日間もリヤカーを引いてゴミを拾い歩き続けるという清掃活動は炎天下での作業のため、全工程を踏破する者はわずかであるが、生徒たちは歩き続けた達成感や、約180袋のゴミを回収した達成感を味わっている。また、平成19年度は、宿泊研修も行い、リーダー育成にも力を入れた。

この活動を通して、ゴミを捨てる人と拾う人がいるということを理解し、自分自身で地域を大切にすることを学んでいる。



<リヤカーボランティア>



<リヤカーボランティア出発！>



<ゴミの回収>

特別賞

■ 天草市立城河原小学校（熊本県）

城河原小学校は平成18年3月に2市8町の合併により誕生した児童数66名の小規模校。合併前よりボランティア活動は行われており、全校生徒により通学路のゴミ拾い、地域の清掃活動、独居老人への花の配布・年賀状送付等を行っている。

平成14年から地域で「ホタルの里づくり」に取り組むこととなり、「ホタルの会」発足の際、趣旨に賛同し参画、その発展として、5年前から捕獲したホタルを天草エアラインに乗せて福岡市の福岡病院の小児科病棟に届ける活動を行い、昨年度からは児童代表と「ホタルの会」代表等が直接病院に届けるようになった。また、病院隣接の私立屋形原特別支援学校との交流を持つようになった。代表児童のみが関わるのではなく、全校児童からの手紙も送り、交流を深めている。

小児病棟の中庭に設置された蚊帳にホタルが放たれると、「初めてホタルを見ることができて嬉しい」「ホタルの光はこんなに明るくてきれいなんだ」と喜ばれ、入院中の子供たちに精神的な活力をもたらす一助となっている。またこの活動を通して児童たちが、自分の生活する地域に豊かな自然が残されているから出来る活動である、と実感し、そこから地域を愛する心や人の気持ちの分かる人間になりたい、と願う気持ちが高まってきていると感じられる。

今後は、ホタルの捕獲で個体数の減少が懸念されるため、生態調査も含めた学習を行っていきたい。また病院、支援学校との交流を深めるため、電子メールでの交信や手紙の交換など継続できる活動を実践し、相手の立場になって行動できる子供を育成したい。



<小児病棟中庭にホタルを放つ>



<動けない患者には虫籠に入れて>

■ 志布志市立通山小学校（鹿児島）

「通山亀ん子クラブ」

志布志市で唯一砂浜の海岸を近くに有する学校であるため、砂浜を活用した教育活動に力を入れている。昭和49年からアオウミガメの放流を行っていたが、それだけでは自然保護、命の教育の推進は不十分であろうとの反省から、平成19年、学校・PTA等と協議し、「通山亀ん子クラブ」を結成。卵の採取、孵化、放流活

動を行うと共に、海岸の清掃等も行っている。構成は、通山小学校の3年生以上の希望者とその保護者、親父の会、校区の公民館、通山小学校PTAの役職員で、現在32名で活動を行っている。

クラブの活動目的は、ウミガメの孵化・放流等をとおして生命尊重の精神を培い、自然保護に対する関心を高め、郷土を愛する精神を養うなど、青少年の健全育成に寄与することである。

クラブが発足したことによって、この活動が地域、PTA、学校が一体となって取り組む有意義な活動となった。また、地域・PTA一体で海岸清掃ができ、地域を大切に作る心や命を大切に作る心の育成につながったと考える。課題としては、まだ一部の児童の活動となっているため、今後より多くの児童の参加する活動としていくことである。

学校だけでなく、親父の会や地域が主体となってクラブ組織で活動をできたことは、活動の継続という意味からも収穫であった。今後は、アオウミガメの命を大切に作る視点で、カメの保護、さらに海岸清掃を通して思いやりの心や地域を大切に作る心を子供たちに育んでもらいたい。これは「幸せの種まき運動」の精神に繋がっていきと考えている。



<カメの誕生>



<カメの放流>

■ 多治見市立多治見中学校 (岐阜県)

「輝き隊」

平成12年、生徒会役員の一部がボランティア活動を公約に掲げ、地域のゴミ分別の協力を始め、それに賛同した10名程度で活動が展開された。翌13年、その活動を生徒会が継承し「多治見中学校 輝き隊」を組織し、以後活動が活発化している。今年度、ボランティア活動を63回実施し、延べ参加人数748人、登録生徒数は227人に上る。

主な活動は①河川敷早朝清掃②公園の定期清掃③花の苗の育種と配布④地域内の小学校、高校との連携による行事アシスタント等、その他地域からの依頼(公民館・児童館、商店街等)による行事の準備・運営スタッフとして参加している。

地域の活動から離れがちな中学生が、ボランティア活動を通じて地域から「当てにされる」存在となり、地域・学校の一体感が生まれ、中学校への信頼も高まった。さらに「輝き隊」のボランティア活動が校区の小学校、近隣の中学校へ広まりつつあり、中学校を卒業した後も、高校や地域でボランティア活動をする生徒が増えている。

多くの生徒が「ボランティア＝無償の奉仕」という一般的な考えでなく、「ボランティアは自己の心を磨く、自己を高めてくれる」と実感しており、人間的な成長の一助となっていると思う。

今後は、芽吹き始めている校区内の高校・小学校とタイアップした活動や自主的な活動を広げていき、地域に「思いやりの心」を発信しながら活動を継続していきたいと考えている。



<河川敷早朝清掃>



<地域での行事アシスタント>

■ 東横学園中学・高等学校 中学2年 (東京都)

今年6月、SYDの「出前講座～貧困と共に生きる子どもたち～」を受けたことにより、貧困と共に生きているフィリピンの子供たちに、自分たちでできることはないかと考え、文化祭に「ストリートチルドレン」に焦点を絞った展示発表、幸せの種まき献金等を行った。

具体的な方法として①誰にでも気軽にできる「募金チーム」②家で眠っている物を「集める支援チーム」③いろいろな人にストリートチルドレンを知ってもらう「宣伝チーム」の3つのチームを作り、生徒がそれぞれのチームに分かれ活動を開始した。

文化祭では、フィリピンをはじめとした世界のストリートチルドレンの現状を展示・発表。中・高合わせた6学年の中で優秀賞を獲得した。

10月30日、集まった支援品、献金と夏休みの課題として作った支援袋をSYDに届けてくれた。生徒たちは「出前講座を受けた時点では、ストリートチルドレンについて「知った」という感じでしかなかったが、文化祭の準備を進めていくうちに、もっと深く知りたくなった」「DVD『神の子たち』を見たことで、自分たちのやる事の意義が見つけた」「出前講座でストリートチルドレンの事を知り、驚いた。文化祭にむけて2～3ヶ月継続的に活動を行った事で意識が高まった」と感想を述べてくれた。

今後も何らかの形で、学んだ事を生かしていきたい。



<文化祭での展示>



<支援品、献金、作った支援バッグをSYDへ届ける>

■ 神奈川県立相原高等学校（神奈川県）

「相っこ」プロジェクトチーム

「残った給食はどうなるのか」そんな疑問から、近隣の小学校を訪ねた。そこでは、年間約20トンが残飯として処理され、その費用も70万円程かかっていた。そこで、畜産を学んでいるからできるリサイクル活動に挑戦した。

リサイクルの取り組みは、給食残飯を利用した①鶏卵生産、②堆肥作り、③鶏卵・堆肥の地域還元の3つである。低コストで環境に優しい独自ブランド鶏卵「相っこ卵」を開発し、さらにその鶏の糞と、校内から大量にでる木々の剪定屑から「相っこ堆肥」を生産、学校の文化祭や地域のイベントで販売・PR活動を行っている。鶏卵は廉価で販売し、堆肥は無料配布している。

現在、地元小学校と「相っこ卵」「相っこ堆肥」を通じた交流活動を行っている。その内容は卵を給食の食材として利用してもらい、堆肥を利用した農業体験学習を実施してもらい、リサイクルの環を体験してもらっている。この活動は、子供たちが食べ物の大切さを感じ取り、まずは「残さない」こと、もし残しても決して無駄にせず「リサイクルする」ことを学んでくれると思う。

今後も現在の活動を継続していき、地域との交流を大切にしながらリサイクルの輪を広げていきたい。そして、環境や食べ物、そしてそこに宿る命について考えてもらえるよう活動をPRしていきたい。



＜相っこ卵を使った給食を小学生と試食＞



＜相っこ堆肥を使い子供たちと農業体験＞

■ 熊本県立盲学校（熊本県）

「按摩奉仕会」

按摩奉仕会は、敬老の日に因んで老人の方々に尊敬の念を表し、併せて生徒の按摩の技術向上を図ることを目的に毎年9月に実施し、今年度で30年、51回目を迎えた。

奉仕会は長い間、理療科の生徒の活動として行ってきたが、平成12年度からは高等部の全生徒で取り組みたい、と生徒会から強い要望があり、生徒・職員全体で対応している。

療養科の1年生が受付や誘導をし、2、3年生が施術、普通科の生徒が接待に当たる。さらに待合室では

高等部普通科の生徒及び小学部の幼児児童による演奏が行われ、幼少部の愛らしく、初々しい演奏は、老人たちの琴線に触れ、感動の涙を誘う。

この活動の中で、老人に対する言葉使い、介助の仕方等を理解、認識し、お年寄りの方々への尊敬の気持ちも生まれてくる。また、いろいろな方々から受ける感謝の言葉で生徒たちが地域社会の中での自己の存在を確認し、これが活動に対する自信を醸し出し、それが次のチャレンジへ繋がっている。

今後も、児童生徒・職員が一体感を共有しながら、この活動をさらに発展させ、豊かな人間性と他者に対する温かな思いやりを有する人材の育成に努めたい。



<奉仕会の受付>



<待合室での幼少部の演奏>

■ 立命館大学国際部国際協力学生実行委員会 (京都府)

2004年12月、スマトラ沖地震及びインド洋大津波が発生、その被災地に対して立命館学園が復興支援を表明、対象地域の学校を再建するというプロジェクトを立ち上げた。その学校の取り組みに共鳴し、「学生だからできる事はないか」と結成されたのがこの会である。設立以来、学園と連携しながらスリランカ及びインドネシア、そして日本国内で様々な活動を行っている。

2006年、スリランカ東部の被災地アルガムベイを訪問し、子供たちを対象とした防災教育を実施した。また、スリランカのマータラを訪れ、小学校での清掃教育や市内での社会調査を行い、現地の小学生と日本の小学生とを繋げる企画にも取り組んだ。2006年のジャワ島中部地震の被災地にも同様の支援を行い、2007年にはインドネシアバントウル県カラキジョ地区を訪れ、小学生との交流活動や、教育に関する住民ワークショップを開催した。

現在、カラキジョ地区において継続的な支援活動として①How To Teach プロジェクト、②防災プロジェクト、③女性コミュニティ開発プロジェクトの活動を実施している。子供に対する質の高い教育の提供と、地域住民の方々により暮らし易い社会の実現を目指すという活動のねらいは、現地の教師との信頼関係が築けたこと、教師や住民が防災や教育に対して意識が高いことにより達成できたと感じている。

会の活動は、従来の「国際交流」から「国際協力」という段階に踏み出しつつある。カラキジョ地区での被災小学校とのつながり、また教師との信頼関係を深め、今後も教育協力、地域コミュニティ開発を中心として継続的な活動を行っていきたい。



<子供たちとの交流>



<教師との交流>

■ ブラジルを美しくする会 (ブラジル)

ブラジルにおいて、日本の文化、掃除哲学を普及することにより、利他の心を養い、特に中・高校生にトイレ掃除と掃き掃除を通して、人間形成と環境の為活動が続けている。発足は12年前、日本の友人に招かれて、阪神大震災の被災者が避難している学校のトイレ掃除に参加した事がきっかけで、イエローハット社相談役の鍵山秀三郎氏の主催する「日本を美しくする会」の活動に感銘し、ブラジルに設立。

発足翌年の1996年には鍵山先生一行19名を迎え、日系人40名とサンパウロ市イビラプエール公園の公共トイレの掃除を行い、第1回掃除を学ぶ会を開催。新聞、テレビ等マスコミに取り上げられた。翌年の第2回大会には市民500名が参加した。参加者の多くは10～20代の青年だった。以来年1回の年次大会には「日本を美しくする会」の会員の応援を得て継続実施されている。

また、月1回、早朝にアクリソン公園の掃き掃除会を、ブラジルを美しくする会の会員を中心に、市民と共に約50名で行っている。現在ではゴミが落ちていなくなり、12年間の継続の力と思っている。

日本の掃除に学ぶ会は、自分自身を磨く事を目的に行っているが、ブラジルではボランティア精神を学ぶ、地球を環境破壊から守る、そして日本の文化を普及する事を目的に活動を行っている。特に参加者が10～20代の中・高校生が多く、またブラジル国民は100ヶ国以上の移民の国でもあるので、掃除哲学を普及する事により、社会に善良な市民が増えていくことを願い、この活動を継続していきたい。



<掃除の様子>



<10～20代の青年が多数参加>

SYDボランティア奨励賞 実施要項

財団法人修養団では、昭和57年より平成13年まで「蓮沼門三社会教育奨励賞」により多くの優れた社会教育活動を実践した個人、グループ・団体を顕彰して参りました。この実績を踏まえ、創立100周年を記念し、新たに「愛と汗の精神」を信条とする《幸せの種まき運動》の実践者を顕彰する「SYDボランティア奨励賞」を設置しました。

主 催：SYD(財団法人修養団)

後 援：文部科学省、社団法人青少年育成国民会議、社団法人中央青少年団体連絡協議会、財団法人日本レクリエーション協会、社団法人日本青年奉仕協会、社団法人日本キャンプ協会

1. 趣 旨

今日、次代を担う青少年の健全育成はますます重要な課題となっている。そこで、ボランティア活動の分野で著しい活動を実践し、優れた業績をあげたグループや個人を顕彰することにより、青少年のボランティア活動を促進するとともに、活動の習慣化を図り、生きる力や豊かな心を育むなど青少年の健全育成に寄与する。

2. 対 象

原則として、ボランティア活動を実践している学校（生徒会、クラス、クラブ等）やPTA、子ども会等のグループ及び個人

3. 選考基準

次の項目に該当し、高い評価を得られたもの

- (1) ボランティア活動の分野で著しい活動を実践し、優れた業績をあげ、今後の活動に期待のできるもの
- (2) ボランティア活動に創意工夫や新しい方策を取り入れ、新機軸を拓き、今後の活動に期待のできるもの
- (3) ボランティア活動を受け入れ、施設の利用、改善、充実に努め、活動の活性化に寄与している施設またはそれを推進する活動
- (4) 青少年の健全育成を目的としたボランティア活動を実践し、将来が期待されるグループ及び個人

4. 選考方法

学識経験者等9名に選考委員を委嘱し、選考委員会にて決定する。

5. 表 彰

文部科学大臣賞 1点

クリスタルトロフィー(表彰状)、副賞(活動奨励金20万円またはSYD「青年ボランティア・アクション in フィリピン」へ2名招待)

優秀賞 4点(小学生、中学生、高校生、大学生・一般の部)

クリスタルトロフィー(表彰状)、副賞(活動奨励金10万円)

特別賞 数点(小学生、中学生、高校生、大学生・一般の部)

クリスタルトロフィー(表彰状)、記念品

6. 贈 呈 式

期日:平成20年2月10日(平成19年度)

会場:SYDホール

7. 募集方法

都道府県教育委員会、社会教育団体、青少年団体、学識経験者およびSYD組織、関係者に推薦を依頼するとともに、新聞、雑誌等のマスコミに広報を依頼する。

8. 応募方法

所定の様式に必要な事項を記入し、活動報告書の上に添付して下記まで送付する。

9. 締め切り

平成20年12月20日(平成19年度)

10. 申込み・問合せ先

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-25-2

TEL:03-3405-5441 FAX:03-3405-5424

E-mail:info@syd.or.jp <http://www.syd.or.jp/>

SYDボランティア奨励賞 係

選 考 委 員

明石 要一(千葉大学教授)	大野 曜([財]日本女性学習財団理事長)
仲野 好重(大手前大学教授)	長沼 豊(学習院大学准教授)
山口 恒人(全日本中学校長会事務局長)	山田 一功(日本PTA協議会相談役)
國分 正明([財]修養団理事長)	山崎 一紀([財]修養団専務理事)
青木 富造([財]修養団青年部長)	



SYD『幸せの種まき運動』とは

－みんなでまこう！幸せの種－をスローガンとして、まわりの人々に、社会に、一粒でも多くの‘幸せの種’をまいていこうという運動です。さりげなく、よろこんで、出来るだけ‘幸せの種’をまいていきましょう。種をまくときは、あなたの“笑顔”という栄養分を添えて！

《三つの‘幸せの種’》

- ☆こんにちは！という‘ふれあいの種’
- ☆どうぞ！という‘思いやりの種’
- ☆ありがとう！という‘よろこびの種’